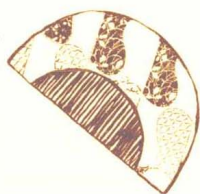


駒田信二



艶笑本の世界

駒田信二



艶笑本の世界

日本書籍

艶笑本の世界

●
定 価
980 円

●
昭和54年 9 月25日
初版発行

●
著 者
駒 田 信 二

●
編集人
市 川 昭 二

●
発行人
朝 居 正 彦

●
発行所
日本書籍株式会社
〒112 東京都文京区小石川4〜14〜24
TEL. 03 (813) 8111

●
振 替
東京 6—26184

●
印刷／製本
東京ベル印刷株式会社

●
0093—10041—6132

艶笑本の世界 * 目次

花 の 幸	5
長枕褥合戰	25
阿奈遠可志	49
逸著聞集	79
貌姑射秘言	101

大東閨語

123

男女烟

145

俳風末摘花

167

壇之浦戰記

215

あ
と
が
き

231

装
幀
*
熊谷博人

花はなの幸さち

一

唐たうの則天武后そくてんぶこうと薛敖曹せつこうそうという男との情事の顛末を語った小説に『如意君伝にようくんでん』というのがある。「如意君」とは、その巨陽のゆえを以て武后に寵愛された薛敖曹の、武后からたまわった名であり、「伝」とは物語の意である。この小説は一名を『閩娛情伝みんごじん』という。「閩娛」とは、閨房のたのしみという意である。

孫楷第そんかいだいの『中国通俗小説書目』（一九三三刊）を見ると、その卷四、明清小説部の乙、煙粉（艶情小説の意）のうちの猥褻の項の冒頭にこの小説が挙げられているが、「未見」として、嘉慶十五年（清の仁宗の時。一八一〇）に御史伯依保ぎよしによって禁書になったことを記し、明人みんの作であろうと推定している。同書の二十年後に出された重訂版（一九五七刊）も変わらない。

この小説が、孫氏のような博覧を以て知られる書誌学者にも長く「未見」のままであるという

ことは、おそらく『如意君伝』が、中国ではすでに散佚してしまっていることを示すものであろう。中国には、その書名だけが残って散佚してしまった書物が、殊に小説類には少なくない（というよりも多い）が、『如意君伝』もまたそれらのうちの一つであろうか。

嘉慶十五年に禁書になったのは『如意君伝』だけではなく、清初の著名な文人李漁（笠翁）の作とされている『肉蒲団』もそうであるが、その『肉蒲団』のなかに『如意君伝』の名が、明らかに明代の小説である『繡榻野史』『痴婆子伝』と並べて挙げられていることから見ても、この小説は明人の作とみなしてよからう。

中国で散佚してしまった小説類の多くがそうであるように、『如意君伝』も、わが国には残されている。この書がわが国ではじめて複製されたのは宝暦十三年（一七六三）であるが、以来綿と伝えられてきて、明治十三年（一八八〇）にも何度目かの複製がなされている。

最初に複製されてから四年後の明和四年（一七六七）には、『通俗如意君伝』という名で翻訳が出された。江戸時代には「通俗」という二字を冠した書物のほとんどは、翻訳である。中国の書物をわが国の一般の人たちにも通じるようにした、という意味であって、勿論「低俗」ということではない。

この『通俗如意君伝』は、半ばはかなり忠実な翻訳であるが、また原文を布衍した部分もかなりあって、翻訳というよりもむしろ「和文如意君伝」といった方があたるように思われる。訳者

の名は「自辞矛盾蒙陸」と記されているが、勿論、匿名であって、何びとであるかわからない。匿名は「じじむさいもうろく」（爺むさい耄碌）の意であろう。

なお、『如意君伝』の作者は、複刻本には「娯門徐昌齡」と記されているが、これも何びとであるかわからない。

江戸時代の艶笑本に、女帝と道鏡との情事の顛末を『如意君伝』あるいは『通俗如意君伝』を下敷きにして語った『花の幸』という小説がある。作者の名も、書かれた年代も明らかでないが、おそらくは中国の俗文学にも通じていた国学者の戯作であろう。

明治以来、幾種類もの活字本がひそかに出しつがれてきたようであるが、私の見た限りそれらのどの版にも、また艶笑本目録のたぐいにも、『花の幸』は「はなのみゆき」と読まれている。だが私は「はなのさち」と読むのが正しいと思う。なぜならば、この小説の標題は、女帝がはじめて道鏡の巨陽をまのあたりに見たとき、「我は独して異なる幸を得たり」といった、その「幸」から出たものにちがいないからである。

二

さて『花の幸』と、『如意君伝』および『通俗如意君伝』とをくらべてみよう。

『如意君伝』には、『まず武后が帝位につくまでのことを手短に記したあとに、薛敖曹の十八歳のときのエピソードが語られる。

薛敖曹は前朝の隋の末、隴西の地で兵を挙げて秦帝と称した薛举の末裔で、いまは洛陽に寓居しているが、眉目秀麗で膂力衆にすぐれた偉丈夫であるばかりか、史書や経書にも博く通じ、書画琴奕の諸芸もよくし、酒は一斗を飲んでも酔わず、その上、常人に異なる壮大な一物を持っていた。

あるとき同じ町の若者たちと酒を飲んだところ、若者たちは彼にその一物を出させて酒興に供させようとした。——そのあとの部分を訓読してみよう。

敖曹曰く、予此の物を以て畢に人道を知らず。時に感ずる所あるも、施すべき地なく、方に用て苦と為す。何ぞ諸君の欲に供するに足らんやと。之を強ふるに、乃ち其の肉具を出す。參瀾稜跼、其の脳に坑窩四五処あり。怒発するに及べば、坑中の肉、隠起すること蝸牛の湧出するが若し。頂より根に至りて、筋、動起すること丘蚓の状の如く、首尾二十余条あり。紅瑩光彩、洞徹にして昏からず。蓋し未だ婦人の漸漬に近づかざればなり。少年之を見て咸驚異し、試みに斗粟を以て其の基首に挂くるに、昂起して余力あり。大咲絶倒せざるなし。

間敖曹、娼家に遊ぶに、初め其の美少年にして歌謳酒令了せざるなきを見、愛して之を慕

ふも、稍く迫りて肉具を覩るに、号呼して避去せざるはなし。間、老いて淫なる者あり、勉強して百計もて之を導かんとするも、終に入るること能はず。敖曹の肉具、名既に彰はれ、肯て与に婚する者なく、居時常に歎嗟して悲生の感あり。

『通俗如意君伝』には、この部分が次のように訳されている。

敖曹云、我此の大肉具なるを以てつひに人道を知らず。たまたま感ずる事ありといへども、此の大肉具を施す女なし。是を常に苦とするのみ。諸君何ぞ見て飲とするにたらん、とぞ嘆じける。然れども強ひて其の肉具を出さすれば、參攪稜跼、其の脛に坑、窩四つ五つばかりありて、怒るときは坑中の肉隠起りて蝸牛の甲の如し。頂より根に至つて筋動くして蚯蚓の状の如し。首尾二十余筋あり。紅瑩光彩洞徹昏からず。未だ婦人に漸漬さざるが故なり。壮年ども悉く見て驚き異しますと云ふ事なし。一斗の粟を囊に入れて其の肉具の首に掛け、昂起する勢を見て笑嘆絶倒せり。敖曹たまたま娼家に遊ぶに、其の美少年にしてしかも歌謡酒令の妙なるにめで、娼婦等も慕ひ来てやうやく親近いて事を始めんとするに及んで、肉具の壮大なるを見ては号び呼はつて避去らざるはなかりけり。年老の淫婦の肥りて丈高きをゑらび遇ふといへども、百計に導びけども終に入りたる事なし。斯る大肉具なる事、世に名

を彰あらはして、肯て婚せんといふ者なし。依つて常に生を悲しみ嘆くの感に月日をぞ送りける。

『花の幸』はどうであらうか。『如意君伝』と同じく、まず女帝が帝位につくまでのことを手短に記したあと、道鏡の十八歳のときのエピソードが語られる。ほとんど『如意君伝』の趣向の、そのままの踏襲である。

道鏡と云へる法師、已事やんごとなき人の胤たねなるが、さる事ありて、御鷹飼下野しもつけが童わらはになりてぞありし。年は十八にて眉目姿美しく、力も人にぞ優れ、朝夕の戯たはぶれ業、必ず召し出いだされて盃きよの興をやりけり。肉具秀うすれて大きにして、世の人の取扱もてあつかふさましては、なかなか堪へがたく、袋ふくろして背後へ引き廻し、腰に物巻きたる如くしてぞ過しける。広く角ありて、窪くぼかなるところ二つ三つあり。怒発いかり出づる時は、窪かなるところどころより豊とよらかなる肉舞うひ出で、蝸牛かたつぶりの春を得たる態さましたり。青き筋、赤き筋、打交りて蚯蚓うづもの打垂うちゆがみたるやうなり。怒発いかりたる亀頭かみづきには、米の袋、銭ぜにの錘懸おもりかけても、なかなか弛たわめる気色なし。京童きやうわらべの打寄りては手叩き笑物にぞなりにける。神崎かんだきの手枕たまくらが此人の姿かたちのよきに、酒の戯たはぶれしたまひて、枕並べつれども、差出さしだしたる有様見て、空蟬うつせみの脱もの衣ぬいして、何地いづちへか行き去りぬ。事に馴しなれたる鳥猿しやざる、吾れ物せんとて、兎角心とかくこころを尽して汗かくまで計はかへども、生瓢なりひょうの蟻の巢窟すみか覗きたるさまして、なかなか

か事行かねば、詮方なしとて是も去りぬ。童も打呻めきて、人ならぬ調度持ちて世の道知らで朽ちなんことよと、常は恨み勝ちにて明し暮すも、見るから哀れなり。

『如意君伝』あるいは『通俗如意君伝』を踏襲していない部分といえは、わずかに「肉具秀れて大きにして、世の人の取扱ふさましては……」云々というところだけである。

だが、そのあとの部分からは、すこしくちがってくる。『如意君伝』では、この薛敖曹十八歳のときのエピソードのあとに、武后と馮小珣（僧懷義）、沈懷瑋、張昌宗、張易之らとのことが語られる。『通俗如意君伝』の方を引いてみよう。

小珣は本より無頼の者にて、長安の葉売なり。彼が肉具頗る堅くして太く、淫薬を煉り傳けるゆゑ、通宵接りても勞れ倦くといふ事なく、甚だ寵愛にあづかれり。巧思あると云ふにかこつけて、髪を剃り僧となり、名を懷義と改め、時々宮中に召入れて淫接し玉ひけるが、後には官を累ねて大総官国公に封ぜられたり。久しうして懷義、富貴に長じて驕り太しく、貴官の人にも無礼をなしけり。又淫女数多く外へ蓄へ置きて淫を専にせり。其の比、御医沈懷瑋といへる寵人ありけるが、是と寵を争つて白馬寺を焼きけるが、餘煙延びて明堂まで焼けたり。依つて太后、太平公主と謀つて、宮中の健婦をあらんで懷義を撲殺し玉ひ、其の

屍を寺へ送りて暴に卒したりと詐れり。

御医沈懷珍も淫を善くするを以て寵を得たりといへども、情慾にたえず、髓竭きて早く病死せり。此の時太后既に七十歳、春秋高しといへども齒髮衰へず、豊肌艶態、宛も少年の如し。願養のあまり情慾うたた熾んにして、宿娼淫婦といふとも及ぶべきに非ず。

たまたま張昌宗といへる者、美少年にして、しかも肉具の大なるといふ事を奏する者あり。召入れて見玉ふに、まことに嫵然として佳麗かりける。此の張昌宗が従兄弟に張易之と云ふ者あり。是も同じき美少年なりしかば、二人とも宮中に召入れ、恩遇甚だ渥くして、司僕卿麟台監の官に至り、爵、国公に封ぜられ、勢さかんなるままに、中外これを恐れて昌宗を六郎、易之を五郎と称す。太后仰せけるは、六郎が面は蓮花の態の如しとて称讃し玉ひける。

……

昌宗易之、更々入りて宿直せり。出て外に居る間は、美女どもと歡淫せり。夜を明しては太后の御側にあつて交會るときは、厭心出来て往々事半にして精氣衰ふる事度々ありしゆゑに、太后の情に慚はざる事のみありける。延載二年の春の比、太后融春園に幸あるに、風光温々として落花砌に結び、飛柳衣を霑し、幽禽乱れ飛んで雌雄群り、蜂蝶花を侵し花を踏みて池上に上下し、物にふれ事に感ぜずといふ事なし。昌宗易之を召して幸せんと思召せど、其の興のすみやかにつぎる事の心憂くやありけん、沈吟歎歎の声を出し玉ふ。時に宦官牛晋卿と

云ふ者、^は陛を歴てのぼり、奏して云く……。

このとき、牛晋卿が武后に薛敖曹をすすめる。

晋卿云、臣いまだ識る人にあらざれども、里中の壮年の物語を聞くや久し。俱に聞くに、彼が肉具大きき一握にあまり、頭は蝸牛の如く、茎は皮を剥ぎたる兎の如く、筋は蚯蚓の状に似て二十条ばかりもあり、其の精力は一斗の粟を亀稜に掛けれども敢て垂る事なし、と語るにぞ、太后も幃屏に倚つて嘆息して、必ずや言ひやむるに及ばず、最早得たるぞとて、其の内帑の黄金二錠、白璧一雙、文錦二端を出し、安車駟馬を以て晋卿に仰せて薛敖曹を召し玉ふ。

三

『花の幸』の方には、道鏡が召し入れられるまでの叙述にこのような委曲はなく、さきに引いた道鏡十八歳のときのエピソードのあとにすぐつづけて、次のように語り進められる。

奈良へ帰りきましての冬霜月、春日野の御詣の御供に下野も参りける。かの童に何くれ取持

たせて、御馬近く渡る折節、薄の枯れたるが嵐に伏したる蔭にまかり居て、尿したるをふと御尻目に見おこせ給ふ。いともすさまじく赤らかなる物の、薄く立ちたる煙の中に、煌めき渡る藤葛の巻きつきたる態して、折々首肯きたる、似る物なく目出度し。帝、御目も奇に打笑ませ給ひて、かかる物も世にありけるにや、唐にては車の尻に聖を乗せて伴ひたり、我は独して異なる幸を得たりと勅して、則ち下野を召し、童を殿守にぞなされけり。

道鏡はこうして、小便しているところをふと女帝に見られ、「かかる物も世にありけるにや」とお氣に入られて召しかかえられるのである。道鏡はすぐに御意に従うが、『如意君伝』の薛敖曹は、一応は辞退する。

朕、万機の暇、久しく幽懷を曠しくす。賢士を得て以て譚讌に接せんことを思う。聞くならく、卿は不凡を抱負し、標資偉異なりと。急ぎ一見せんと欲す。朕が餓渴の懷を慰めよ。其の諸の委曲は去使能く悉さん。専ら身を潔くして朕が意に孤くこと有る母れ。

勅使として自分を迎えにきた牛晋卿から、薛敖曹は右のような武后の詔書を示されるが、「下賤の資、聖徳を汚漬するは、臣の宜しとするところにあらず」といって、ことわる。だが牛晋卿